

III みらい 未来 みとお を見通す



こむぎ 小麦 しゅうかく の収穫 きょうえい (共栄)

プ ロ ロ グ Ⅲ

さわやかに晴れ上がった夏のある日、25年ぶりに忠類を訪れた。

ナウマン象記念館やホテルアルコは当時のままの佇まいだが、道の駅は移転し、旧道の駅は野菜販売所になっていた。そして、ナウマン公園は…。すっかり変わっていた。木製のアスレチック遊具は姿を消し、近代的なウォータースライダーとなが〜い滑り台が設置されていた。

青い空に白い雲が浮かび、芝生の緑が輝く中で、たくさんの子ども達が歓声をあげて遊びに興じ、芝生に寝ころんで子ども達の姿を見守る親達の穏やかな表情は、あの日と変わっていなかった。

25年前のあの日、僕は父と母と妹の四人で忠類を訪れていた。帯広から忠類までのプチ家族旅行だった。このプチ家族旅行の後、父が仕事上の事故で急逝し、母は幼い僕と妹を育てるために昼夜を問わずに仕事に出るようになり、以来家族旅行に出かける余裕はなくなった。僕も妹も夏休みにどこかへ連れて行ってほしいとは思ってもしなかった。そんな暇があるなら、母に少しでも休養してほしいと思った。

あの日の忠類旅行が、結果として我が家の最後の家族旅行となった。楽しかった。木製のアスレチック遊具は、お城のように見え、未知の世界にワクワクして夢中で冒険した。園内を流れる小川はサラサラと音を立てて流れ、ほてった足を入れるとひんやりと心地よかった。緑の芝生はマットレスのようにフワフワしていて、その感覚がうれしくて妹と訳もなく走り回った。ナウマン象記念館では骨格標本のナウマン象の大きさに驚き、ナウマン温泉ではヌルヌルのお湯が不思議でならなかった。

そう言えばあの日、同い年の地元の女の子——名前は確かハナコちゃんと言ったか——と知り合い仲良くなった。アスレチックの周りでチョコレート石を拾いながら、忠類には不思議がいっぱいあるよ。忠類は楽しいところだよと教えてくれた。彼女は今どうしているのだろうか。

あの夏の日、父と母と妹と家族で過ごした一日を僕は忘れたことはなかった。ナウマン公園の景色も、母が作ったお弁当も、父や母との会話も、ハナコちゃんの健気な姿も、何もかも鮮明に思い出すことができる。

父が逝き、母一人の稼ぎで生計を立てている困窮の中にあっても、あの夏の一日があったから、寂しいと思ったことはなかった。よその家族をうらやましいと思ったこともなかった。

公園の芝生に寝そべり、しばしボーッとしていた僕に、

妻が「なんか無口ね。もう疲れたの。」と声をかけた。

僕は「疲れてなんかいないよ。とっても幸せな気分ひたっていただけ。」と答えた。

妻は「ふーん。」と気のない返事。

ウォータースライダーを見ると、息子と娘がキャーキャーと叫びながら滑り降りるところだった。そこにはあの日の僕と妹がいた。



「家族連れでにぎわうナウマン公園
なが〜い滑り台付近」

* この物語はフィクションです。

Ⅲ 未 来 を 見 通 す

1 農 業

(1) 畑 作

「忠類が叶えてくれたもの」

加 藤 誠

平成28(2016)年4月、「農業経営者になる！」という幼い頃からの夢を叶えるために、忠類へ新規就農者として妻と二人の子ども達と移住してきました。

私は芽室町の畑作農家の四人兄弟の末っ子として生まれました。幼い頃から、トラクターやコンバインを運転する父の姿に憧れ、毎日献身的に父を支える母の姿に敬慕し、いつしか「父と母のような農家になりたい。」と強く思うようになりました。しかし、九つ上の兄が先に家業を継いだので、私が家業を継ぐことは難しくなり、農業経営者になることを一度は諦めました。



「今後の経営について語る

加藤さん

私は大学へ進学し、卒業後はアイスホッケー選手として活動しました。しかし、農業経営者になりたいという気持ちは捨てることはできませんでした。平成25(2013)年に兄との共同経営の可能性を模索するために帰郷しました。それから2年間農業に従事しましたが、私の心の中に「経営のトップとして判断をし、その判断に責任を持って農業を行いたい。」という考えが徐々に大きくなっていくのを感じました。そこで、私は独立して農業をやることを決意し、就農地を探すことにしました。十勝管内のJAに足を運び、就農について話をしましたが、どのJAでも簡単に断られてしまいました。そんな時、私の話に耳を傾けてくれたのがJA忠類でした。



「麦秋(7月)

～新型コンバインでの刈り取り～

小規模ながら就農のチャンスをいただき、大喜びをしました。ただ、その気持ちとは別に、「霧と低温は畑作に不向き」「忠類は酪農」というイメージが心をよぎったのです。しかし、実際に就農してみると、十勝中央部に比べ暑すぎず、畑作にとって適度な温度環境ではないかと感じるようになりました。また、忠類地域の8割以上が酪農家の中、麦稈と堆肥の交換、作業の受託と委託等、耕蓄連携は

畑作経営に新しい考えをもたらし、必ず私の経営の強みになると確信するようになりました。



「青々と大きく葉を広げるビート
(8月上旬)」



「ハーベスターでのビートの収穫
(11月上旬)」

農業界全体の問題として、私たち若い世代は農家戸数の減少にも対応していかなければいけません。農家戸数の減少は、一戸あたりの耕作面積を増加させ、労働力不足を生みます。令和の時代は、農業機械の大型化、効率化が重要視されることでしょう。経営規模が拡大すれば、農業にかかわる時間が増し、家族と過ごす時間が削られてしまうこともあり得ます。そうなれば、農業の魅力が半減してしまいます。次世代に魅力的で持続可能な農業を引き継いでいくためには、農作業の効率化により労働生産性を向上させ、労働時間を増加させない取り組みを進めていく必要があります。

家族が六人となった今、家族を養っていく責任はさらに大きくなりました。しかし、それは負担ではなく、私の励みです。まず、私の信じる道を、私らしく生きていこうと思います。

そして、忠類のみなさんと大地からいただいたご恩をこれから少しずつ返していこうと思っています。

忠類で農業経営者になれたことを誇りに思い、地域のみなさんと協力しながら、地域に貢献できる方法を見つけたいと思います。

加藤 誠

芽室町に生まれる。平成28(2016)年に忠類に転入して畑作を始める。

小麦、馬鈴薯、豆類、ビート等を栽培する。また、近隣の牧場に働きかけ、精力的に耕畜連携を行う。

(2) 酪農

「とちかち農村ホームステイから忠類を考える」

岩谷史人

平成21(2009)年に浦幌町で試験的に始まった都会の高校生のホームステイ受け入れが、翌平成22(2010)年には忠類でも2軒の酪農家からスタートしました。以降、令和元(2019)年までの10年間で、のべ23,000余名の高校生が十勝にやって来てホームステイを体験しています。令和2(2020)年・令和3(2021)



「笑顔の高校生(放牧地にて)」

年は、残念ながら新型コロナウイルス感染症により、この事業は中止を余儀なくされましたが、この“とちかち農村ホームステイ”で忠類にやってきた高校生が、農家で一泊のホームステイと農作業を手伝ったことで、どのような感想を持ち、どのように変化して都会へ帰っていったかを知ること、ここ忠類の特色や魅力、忠類が持つ価値について考えてみましょう。

「こんな何にもない所へ来て、何が楽しいのかね?」「とちかち農村ホームステイ”を始めたばかりの頃に地域の人によく言われた言葉です。

確かにここには都会にあるような映画館や遊園地、ショッピングモールといった大型娯楽施設はありません。歩いて5分の距離に何軒ものコンビニがあって、深夜でも欲しいものが手に入るような便利さありません。しかし、それらが揃っている都会の高校生たちは、十勝に降り立って、真っ先に目に飛び込んでくる日高山脈と広大な畑や牧草地に感嘆の声を上げるのです。なぜでしょう?何もないはずのこの地域のどこに感動し感嘆の声を上げるのでしょうか?

高校生たちは、普段高層ビル群の間隙から僅かに見える空しか見ていません。その空が実はこんなにも広々としていたことに驚きます。都会の喧騒から離れ静かで街灯もない夜の暗闇に、吸い込まれるような恐怖を感じます。また、暗闇だからこそ望める満点の星空を見上げて初めて宇宙の本当の姿を目にします。ここは高校生の心を揺さぶる大きな価値のある自然が身近に感じられる地域なのです。

もう一つ、ここには豊かな大地があります。畑ではビートやイモ、小麦、豆類をはじめ様々な野菜が栽培されています。牧場では牛や豚が飼育され、生乳や食肉が生産されています。都会の高校生のほとんどが、普段食べている食物がどこでどのように生産さ

れているのかを知りません。おそらくそんなことを考えることもなく食事を摂ってきたことでしょう。そんな高校生たちが、農作業の手伝いをしたり、農家から苦労話を聴き農業の大変さを実感したりして、食料が手に入ることや日々食事が摂れることが決して当たり前ではないことを知ります。そして、食への感謝の気持ちが芽生えるのです。

その他にも畑の作物や山の木々は、人間が生きていく上で最も必要な酸素を供給してくれています。山間から湧き出る水もまた人間が生きていく上で欠かせないものです。そうです。ここには人間が生きていく上で必要不可欠な食糧と酸素と水、つまり“いのちの糧”を生み出す大地があるのです。

いのちの糧を供給する田舎といのちの糧を消費する都会が、互いに理解し合い手を携えて協力していくことが、この社会を次世代に繋いでいくためにはとても重要なことなのです。

さらには、この地で暮らす人々の生活も、都会での生活を改めて考える機会を提供しています。満員電車で揺られ、無言で速足で歩き、いつも何かに追われるように孤独感の中で生活することが日常とと思っている都会の高校生から見ると、ここに暮らす人々は自然体でゆったりと暮らしているように見えるのです。そして、知らない人を信用しないように教わってきた都会の高校生たちは、まるで我が子のように迎え入れてくれるこの地域の人々に触れて、初めて信用してもよい大人に出会えたように思えるのです。社会の中で信用できる人がいることが、どれだけ心強いかを教わるのです。

これが“とちかち農村ホームステイ”で一番大切なことだと思います。

さて、“とちかち農村ホームステイ”を体験した高校生の目線で、忠類の持つ特色や魅力、価値について例を挙げてみました。この他にもまだまだたくさんあります。でも、その良さに一番気づいていないのは、忠類に住んでいる私たちなのかもしれません。

探してみましよう 忠類の特色。

感じてみましよう 忠類の魅力。

そして考えてみましよう 忠類の価値。

岩谷 史人

京都市に生まれる。平成3(1991)年に忠類に転入して酪農を始める。

幕別町教育委員会教育委員、幕別町生活安全推進協議会理事

幕別町観光物産協会理事、幕別町6次産業化・地産地消推進協議会委員長

北海道酪農教育ファーム推進委員会委員長、NPO法人食の絆を食む会理事

(3) 百合根

「百合根への思い」

あか さか ゆう すけ
赤坂勇介

私は10年前に大学を卒業してから、農業で自立することを目指して5年間の下積みを経て、ここ幕別町の忠類地域で百合根農家として新規就農を果たしました。百合根という作物に出会ったきっかけや百合根への思いを綴りたいと思います。

私は岩見沢市で生まれ育ちました。同じ北海道ですが、私の育った岩見沢市のある空知管内は十勝管内とは気候が異なり、冬は雪が多く十勝管内ほど寒くありません。生まれ故郷の岩見沢市は稲作が盛んな地域で、百合根も栽培されていました。1年に2度程度の頻度で学校給食に百合根を使った料理が出されていました。今思い返すと、これが私の百合根との出会いでした。百合根というよく分からない不思議な食材の上品な甘さや食感が気に入り、親に「ゆりねってなに？」と聞いたことをよく覚えています。



「作業の手を休め
思いを語る赤坂さん」

私は小学校から高校までは地元岩見沢の学校に通い、大学は北見市で一人暮らしをしました。家族で釣りやキャンプに出掛けたことがきっかけだったでしょうか、幼少期から自然が大好きでした。ですから、北海道の豊かな自然を守っていきたくらい理系大学に進学しました。大学で学習を進めるうちに、自然を守っていく仕事というよりも自然の中で働く職業に就きたいと思うようになりました。大学卒業後は、友人の紹介で幕別町の農家に就職しました。日々の農作業はとても気持ちがよいものでした。大変な作業もありましたが辛いと感じたことはありませんでした。ただ、従業員としてずっと働くのではなく、いつか独立して経営者になるという目標を就職当時から持っていました。そんな時、幕別町の忠類地域で百合根が栽培されていることを知りました。そして、忠類の百合根が国内外で高く評価されていること。百合根という作物は機械化ができない作業が多く手間がかかること。そのため機械導入などの初期投資が少なく済み、1反あたりの反収が高いこと。何よりも百合根が珍しい特産品であることから、百合根栽培を軸に独立することを決意しました。

現在、私は忠類百合根耕作組合の一員として百合根を栽培しています。幕別町忠類地域の特産品として、高品質の百合根を提供できるように日々努力しています。農家戸数の減少や気候変動など課題は山積みですが、自分も含め若い世代から産地を盛り上げてい



「病気になるように
ビニルシートで覆われた種百合」

けたらいいなと思っています。まずは産地の若い世代から百合根を食べる文化を根付かせていくことが百合根の未来、ひいては『忠類の未来』につながると思っています。十勝管外からやってきた私を優しく受け入れてくださったこの地域に少しでも貢献できるように、百合根農家として今後も頑張っていこうと思います。

新規就農にあたり、忠類農協はじめ忠類

百合根耕作組合のみなさん、百合根の栽培研修を受け入れてくださった大坂農場さんに、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

赤坂 勇介

岩見沢市に生まれる。幕別町農業振興公社まくべつ農村アカデミー修了。

平成28(2016)年に忠類に転入して百合根の栽培研修を始める。

平成30(2018)年に新規就農し、本格的に百合根栽培に取り組む。

忠類百合根耕作組合の会計として組合活動を進め、忠類純白百合根の栽培に精力的に取り組む。

<百合根の出荷>

① 手掘りした百合根の根切り



② 根切りした百合根の洗浄



③ おが粉を使った百合根の箱詰め



④ 忠類農協集荷場へ出荷



※保湿および緩衝材としておが粉が使用されています。

撮影協力：野坂農場

2 林業

「育苗・造林分野と忠類っ子の将来像」

鈴木 亜希子

日本は、国土の約70%が森林という森林国です。森林は、水源涵養機能（水を貯める）、土砂災害防止機能（土砂崩れを防ぐ）、快適環境保全機能（大気の浄化）、地球環境保全機能（地球温暖化を抑制）、生物多様性保全機能（生態系を守る）、物質生産機能（生活資源の供給）、保健・文化機能（心身のリフレッシュ）と多くの機能で私達の生活を支えています。このように私達にとって重要な森林をフィールドに生計を立てているのが林業です。林業は、植えて・育てて・伐って・使って・また植えるという循環性を持つ持続可能な産業です。

現在、1960年代の終戦直後や高度経済成長期に一斉に造林されたカラマツなどが利用期を迎えています。しかし、労働者の減少、生産性の低さ、林道や機械化などの基盤整備の遅れなど、多くの問題が山積みとなっています。中でも、苗木の生産や造林・保育作業は、スマート化が出来ずに遅れた分野です。このような状況から、林業従事者は、この四半世紀で半以下に減少してしまいました。そこで、2000年頃から林業大学校が相次いで創立され、研修制度が確立されたり、就活セミナーが行われたりするようになりました。これらにより、34歳以下の若い林業従事者が増えてきています。そして、木材の輸出量は、1993年から2015年の間に44倍も増加しました。

大坂林業では、深刻な人手不足の解消のために、柔軟な雇用体系の確立や通年雇用対策などの努力をして、若い職員を増やすことができました。「新しいこと次々と」をスローガンに、画像識別による選別機や協働ロボットの導入など、新しいことにチャレンジし続けています。私たちが、創意工夫を凝らしてチャレンジし続けることで会社が存続し、ひいては地域の力にもなると確信しています。



「苗木を画像識別する選別機
“苗木の大きさ・太さを選別”」



「ポットを運ぶ協働ロボット
“日本の農業分野で初の導入”」

私は忠類生まれです。16歳から15年間を札幌で過ごし、2006年11月に忠類へ戻った時、「忠類村」は「幕別町忠類」になっていました。その後、忠類地域住民会議や商工会青年部の活動の中で、村出身を恥ずかしがる忠類っ子がいること知り驚きました。私は「ナウマン象が発掘された忠類村出身です。」と自慢げに話し、誇りに思っていたので、“忠類の良さや、私が知っている忠類のみなさんの温かさを子ども達に伝えていきたい。”と考えるようになりました。



「ナウマン太鼓

(どんどこいむら祭りにて)



「ナウマン象の神輿

(忠類神社秋祭りにて)

忠類の大人のみなさんは私に沢山のことを教えてくれました。忠類音頭やナウマン太鼓を残したい気持ち

ち、忠類ナウマンそり大会の大会名に「全道」をつけた理由、忠類神社の御神輿にナウマン象が乗っていること、白銀台スキー場でレンタル事業を始めた動機など。これらは「忠類を思う気持ち」から生まれたものだと思います。そして、私が幼い頃から当然のように故郷への誇りや愛着を持っていたのは、忠類の大人のみなさんの温かい言動の中で育ったためだと思います。忠類の大人のみなさんは、忠類に来た人に楽しんでほしい。そしてまた来てほしい。そんな気持ちが言動に表れていました。

「これからの忠類」のために私達大人は、忠類っ子が故郷を誇りに思えるように。そして、その忠類っ子が大人になった時に忠類のよさを伝え続ける人であるように。「持続可能な忠類」であるように行動しなければならないと思います。

鈴木 亜希子

忠類に生まれる。(有)大坂林業で取締役として苗木の生産に取り組む。

「ちゅうるい結の会」、「パオッズクラブ(会長)」のメンバーとして、積極的に活動に参加し、地域の各種住民活動を推進する。

忠類地域住民会議委員、幕別町社会福祉協議会監事・評議員選定委員会委員
幕別町共同募金委員会監事

3 観 光

「地域観光の将来像は」

加 藤 茂 樹

「それじゃ、日高山脈を、貼り絵にしたらどうだろう。先生も日高の風景が一番だと思う。」
六年生の時、卒業記念のテーマを決めるホームルームの時でした。普段から日高山脈に惚れ込んでいた担任の先生が、皆に混じってアドバイスを出したのです。材料は、家に余っているハギレを集め、レイアウトした鉛筆画に貼っていく。色とりどりの布が大量に集まりました。大きさはベニヤ板を縦に六枚並べたもので、とにかく大きく、それは、当時の体育館の大壁に展示するための、相応しい大きさでした。ベニヤ板は大キャンバスとなり、先生も児童も、四つん這いになって、風景の輪郭を描いていきます。それを見て、卒業生の思いが一つになり、日高のイメージが膨らんだのです。



「自然のキャンバス
～共栄の丘そして日高山脈～」

子ども達は毎日のように日高を目にしています。春から秋にかけて、移りゆく色彩をまぶたに浮かべながら、巨大キャンバスに向かったのです。日高の麓に繋がる稔りの大地は、ハギレが醸し出す、赤や緑、黄や青が混じり合っ、印象深い秋の田園風景に、創り上げられていきます。麓に近くなるにつれ、褐色のハギレは、冬に近づく山脈の様子を表現しています。そして真っ青な空、遠くから眺めると、十勝平野を包み込む、山の神様のように雄大なパノラマに仕上がりました。

「忠類から眺める日高の景色は、何処にも負けない一番だぞ。」そう言い残し、いつしか担任の先生は転勤していきました。六十年近く前の事です。

それ以来、日高山脈の景色は故郷の財産と思うようになりました。周りから教えられなくとも、毎日のように眺めていると、次第に日高への視線が、研ぎ澄まされていくのです。やがて人に自慢したくなるものです。南十勝5町村の商工会代表が、集まった時のことでした。町村自慢を語る場で、皆それぞれ、我が町から眺める日高が最高であると、競い合う場がありました。もちろん決着はつくはずもなく、「それじゃ、南十勝の絶景の一つとして、日高を素晴らしい観光資源に育てていこう。」と、観光マップを作ることとなりました。

忠類地域の基幹産業は、農畜産業で、主力の生乳のほか、高級食材百合根の産地として有名で、都市部を支える生産空間として機能しています。道の駅忠類の近接エリアには、温泉宿泊施設、キャンプ場、直産品販売施設、パークゴルフ場、ナウマン象記念館、噴水と遊ぶ大型遊具など、年間入り込み客数が三十万人と忠類地域観光の拠点となっています。

しかし、観光資源が豊かであるにも関わらず、この集客数に対して経済波及効果が実感されていないと感じるのは、地元の人達です。その一方で、道の駅の賑わいを地域の活性化に繋げていこうという取り組みは、何年も根気良く続けられています。

幕別町との合併後、行政側との意見交換会の折、キャンプ場利用料金の徴収もあってし

かるべきとの要望も、料金の発生は、お客が来ない、お客が逃げてしまう、逆に経費の負担が増える等、先へは進まないのです。そこには、観光をお金に転化することが、難しいもどかしさと、課題が残っています。

生産空間という言葉、最近耳にするようになりました。イメージは基幹産業だけのものと思われがちです。一度立ち止まって、観光も生産空間として考えてはどうだろうかと思ひます。観光を生産しましょうと。農業生産も原価が発生し、販売により、利益を生み出します。地域観光施設に、従来よりも、クオリティの高い付加価値を付け、経済効果を、向上させることも可能となります。

それにはまず、地域の魅力を再発見することです。地域の人達が、他町村と比較して、自慢できるものが、まだまだ隠されています。そして、観光資源はもちろん、地域の歴史や文化を子ども達や若者に気づいてもらうことが大切です。町外の人達や、地域おこし協力隊も、たくさんヒントをくれます。

「昔は人も多く、賑わっていた。」地元で長い間暮らし、懐かしむ大人や、高齢者の方々も、孫や子どものために、昔から続く魅力を伝えてほしいと思ひます。

以前、知り合いに言われたことがありました。羽田から帯広への便が、着陸態勢に入り、高度を下げる際、忠類の真上を通過することが羨ましいですと。言われてみて初めて気が付きました。冬はナイタースキー場を、夏は忠類シーニックカフェにある東屋の真上を低空で通過します。十勝を訪れる観光客に、空からアピールができるかも知れません。機内放送で案内してくれると、宣伝効果抜群です。

一方、地域振興の壁になっていることもあります。道の駅周辺は公用地がほとんどです。公の土地で、観光を目的とする民間事業の参入は、規制される内容を考慮の上、賑わいを創出する議論も必要と思ひます。

未来を託す子ども達に、地域の良さをもっと知ってもらいたいのです。

観光資源はいくらでもあります。就職や進学して、忠類自慢を友達に語ってほしいのです。そうすると、友達が遊びに来てくれます。次第に輪が広がります。我が町の良さを知ること、観光の原点となります。

その良さの一つ、子どもの頃教わった、日高山脈の魅力は、色褪せることはありません。十勝晴れの眩しい日高山脈は、南十勝に住む誰もが、絶賛しています。南十勝で共有する日高山脈は、観光の一大生産空間の要として位置づけられ、共通の観光テーマとなるでしょう。

南十勝と繋がることは、今まで点だけの観光だったものが、線で繋がり、やがて面へと広がっていきます。未来像のヒントは、身近にあり、再発見することから始まります。

加藤 茂 樹

忠類に生まれる。(株)加藤建設代表取締役として、公共土木事業をはじめ各種建築事業を手がける。また、シーニックバイウェイ南十勝夢街道副代表として、活力ある地域づくり・魅力ある観光空間づくりに取り組む。

4 コミュニティ

「アクティブエイジングの活動を」

武内 悠紀夫

私は、**商社マン**として**40年間**国内外で働きました。仕事をやりきったという**充実感**から、**定年退職**を機に、**自然豊かな土地**で生活したいと**忠類村**へ来ました。当時の**二川村**長さんをはじめ**地域のみなさん**に温かく迎えていただき、“**新しいふるさと忠類**”での生活をスタートさせることができました。

転入してすぐに**忠類老人クラブ**に入会しました。クラブの**行事や会合**に参加することで、**地域のみなさん**との**つながりが強いもの**になっていくのを肌で感じながら、平成16（2004）年にはクラブの**会長職**を拝命しました。記憶に強く残っているのは、平成18（2006）年の**幕別町との合併**の時です。クラブの名称を**シニアクラブ**に変更することを**提案**しました。シニア世代が**地域づくりの担い手**として活動して**年齢を重ねていく**、**アクティブエイジング**の考えの下に**活動を進めよう**と考えたのです。以来17年、**伝統ある行事**を大切にしながら、**会員相互の親睦**を図ってきました。忠類シニアクラブ発足当時**108名**を数えた**会員数**は、令和4（2022）年には**50名**となり**半減**してしまいました。この**50名**という数は、**地域の60歳以上の人口**の約**30%**にあたります。**地域社会づくり**に貢献するシニア世代の**つながり**を広げていくことが、**今、忠類シニアクラブ**に求められていることだと考えています。



「忠類シニアクラブ スポーツ大会」

しらかば大学ナウマン校の**ダンス科**で活動しています。科のみなさんと月に**1回**、**社交ダンス**をはじめ**各種ダンス**を楽しんでいます。ある**テーマ**をもって**一定時間**に体を動かすことは**健康**によいことはもちろん、**みなさんとのコミュニケーション**を図る場にもなっています。大学という名称から、**堅苦しいイメージ**を持たれる方もいらっしゃると思いますが、**どの科も和気あいあい**と**家族**のように活動しています。同好の仲間、**共同体**として活動することは、**正しくコミュニティ**です。この**コミュニティしらかば大学**は、**卒業**を考える必要のない**大学（活動）**です。活動の質を自分で考え、活動の質を急に**低下**させることなく、**年齢を重ねていける大学（活動）**です。

【しらかば大学】

60歳以上の町民なら誰でも入学できます。クマガラ校・南幕別校・ナウマン校の**3校**があります。グループ活動を通して、**豊かな人間性**、**心身の健康保持**、**余暇時間の活用**を図り、**自ら生きがい**を見つけることを目的としています。年間**20単位**取得で**進級**（大学は**1年生**から**4年生**まで**進級**。大学のあとは**大学院**となり、**1年生**から**無制限**の**進級**。令和4年には**大学院21年生**の**在籍**がありました。）できるシステムを取り入れ、**年間の活動目標**を誰にでも分かるように設定しています。



「ナウマン校ダンス科の発表
（しらかば大学大学祭にて）」

忠類地域の各団体、各年齢層を対象にした意見交換で、「地域の活性化は、行政に任せておけばよい。」という意識が強いことが分かりました。地域の活性化は行政任せというこの意識を払拭し、地域住民の一人一人ができることは自分達の手で行おうという意識を高めるため、シニア世代から何か行動を起こせないかと話し合いました。

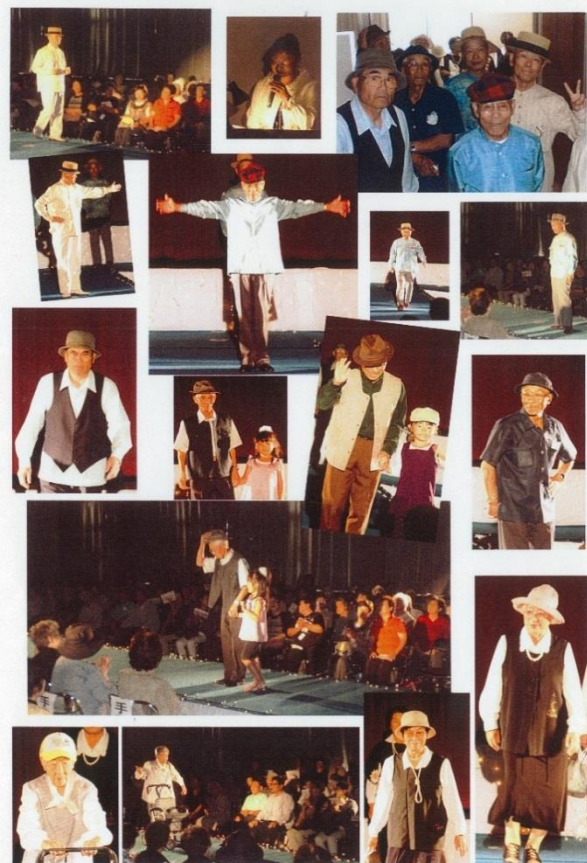
そこで、ある業者さんの意見を参考に、これまでにない画期的な企画をと「忠類シニアファッションショー」を立ち上げることにしました。本来、組織の母体や活動の目的の異なる忠類シニアクラブとしらかば大学ナウマン校ですが、忠類地域の振興発展の目的の下、二つの組織が力を合わせ、合同で企画・運営をすることにしました。

開催までの役割分担や日程等の詳細な話し合いから始まり、各家庭に眠っている着物の集約、着物をリメイクするための話し合い・実際の縫製や裁縫作業、忠類シニアクラブとしらかば大学ナウマン校の会員からのモデル選出・モデルの歩き方指導やメイク指導、リメイク前後のデザインが分かる当日配布用チラシの作成、当日に会場を盛り上げる歌謡ショーやビュッフェの企画、4回におよぶりハーサルの実施…。時間を惜しまないみなさんの強力な取り組みが支えとなり、この企画を開催にこぎつけることができました。

平成22（2010）年9月11日、町内外250人の来場者を迎えて、「忠類シニアファッションショー」の幕が上がりました。スポットライトを浴びてさっそうと歩くモデルのみなさん、モデルのみなさんを会場全体で応援する優しい雰囲気。この様子を見て、開催までの苦労がやってよかったという喜びに変わっていきました。シニア世代だけでも地域の活性化へのお手伝いができることを証明した瞬間でもありました。

平成26（2014）年、第5回には来場者は498人となりました。しかし、縫製や裁縫作業をする人材が確保できなくなり、この第5回をもってこの企画は終了せざるを得なくなりました。

私達シニア世代のこの取り組みは、地域の振興発展・一人一人が生き生きと活動する取り組みとして、忠類地域に一つのモデルを提示することができたと思っています。私達に続く次の世代のみなさんが、新しい取り組みを始めてくれることを楽しみに待ちたいと思います。



「忠類シニアファッションショー（第1回終了後に発行された通信より）」

武内 悠紀夫

愛知県名古屋市に生まれる。40年間の商社勤めを経て、平成12（2000）年に忠類に転入する。

忠類地域の各種の活動に積極的に参加し、忠類地域の振興発展に尽力する。

忠類シニアクラブ会長、しらかば大学ナウマン校副会長

5 特別寄稿

「忠類ナウマン象」と私たち

幕別町教育委員会学芸員

添 田 雄 二

はじめに

1969年7月忠類村（現幕別町忠類）晩成の農道工事中にナウマンゾウの臼歯化石が発見され（写真1）、同年8月の緊急発掘と10月の予備調査（第一次発掘）、1970年の本発掘（第二次発掘）を経て、世界初となる1頭分の「忠類ナウマン象」化石が発掘されました。化石は札幌にある北海道立の北海道開拓記念館（現北海道博物館）に収蔵され、1972年には全身復元骨格第1号標本が公開されました。忠類村でも1979年から第5号標本が展示され本格的に観光振興の目玉となり、発見から約20年後の1988年には待望であった「忠類ナウマン象記念館」が開館しました。

その後も忠類がナウマンゾウと共に発展していく中、日本でナウマンゾウ化石の発見が増え新しい研究方法も次々と開発されたことを背景に、2000年代に入ると忠類ナウマン象の研究が劇的に進みました。ここではまずそれらの研究成果を通して、忠類ナウマン象や関連化石の学術的価値が、発見から50年を経過して益々高まっていることを紹介します。そして、2019年度と2020年度の「忠類ナウマン象化石発見・発掘50周年記念事業」で実施した子ども達との体験学習にも触れながら、これからも私たちと共に未来へ向かって歩む忠類ナウマン象の姿に思いを馳せてみたいと思います。

なお、「ゾウ」の表記はアフリカゾウやアジアゾウなど一般的に使用されるカタカナとしましたが、忠類標本についてはこの地で親しまれ定着している「忠類ナウマン象」と漢字で表記します。



写真1 発見当時に撮影された臼歯化石

（上顎の左第3大臼歯）

中央からやや左には、工事現場でツルハシが当たった跡とされる穴と大きな亀裂がありますが、その後修復されました。

忠類ナウマン象の渡来

そもそも、忠類ナウマン象はいつどこからやって来たのでしょうか？

日本最古のナウマンゾウ化石は大阪地方で発見されており、約34万年前の氷期（地球上の氷が増えて海水面が下がる時期）に浅海化した対馬海峡付近を通過して大陸から渡来した

と考えられています。その後、ナウマンゾウは現在のような温暖期が訪れるたびに徐々に北上し、約12万年前に北海道へ到達しました。そのうちの1頭がのちに忠類ナウマン象化石として発見されるのです。なお、12万年前の津軽海峡は浅海化も陸化もしていないため、現時点での化石記録からは泳いで北海道へ渡って来たことになります。

北海道では忠類の他に4地点で臼歯化石が発見されています(図1)。忠類標本よりも前に発見されていた雨竜および栗山標本の年代も約12万年前とされていますが、具体的な産出層が不明で確実ではありません。したがって、忠類標本が北海道最古と言えます。また、北広島標本(3点のうち1点)と湧別標本は約4.5万年前と約3.5万年前という年代が得られていますが、この頃はマンモスゾウも生息していたほど今より寒冷な氷期で、南方から来たナウマンゾウが環境に適応していた様子がうかがえます。



図1 ナウマンゾウ化石の発見地と産出

赤色の数字が産出数です。忠類標本以外は全て臼歯の化石です。

日本で最も有名なナウマンゾウ「忠類標本」

ナウマンゾウの産出地は九州から北海道まで200か所以上におよびますが、体の主要部の骨が多く産出し全身骨格が復元された標本は4例しかありません(忠類標本、千葉県印旛沼標本、東京都浜町標本、神奈川県天岳院標本)。このうち最も多くの骨が産出したのが忠類標本であることから、全身復元骨格は23体も作製され、国内の博物館の他、クウェートにも展示されています(表1)。

忠類標本の復元骨格の大きさは、肩までの高さが約2.1m、切歯の先端からお尻までが約4.3mで、アジアゾウと同じかやや小さいサイズです。

表1 「忠類ナウマン象」全身復元骨格標本の所蔵施設一覧

標本番号	所蔵施設名	標本公開年（旧名称、旧所蔵ほか）	所在地
第1号	北海道博物館	1972年（旧名称：北海道開拓記念館）	北海道札幌市
第2号	大阪市立自然史博物館	1973年	大阪府大阪市
第3号	高松市こども未来館	1975年（旧名称：高松市民文化センター）	香川県高松市
第4号	浜松市博物館	1979年	静岡県浜松市
第5号	忠類ナウマン象記念館	1979年忠類村コミュニティーセンター 1988年忠類ナウマン象記念館	北海道幕別町
第6号	富山市科学博物館	1979年（旧名称：富山市科学文化センター）	富山県富山市
第7号	新潟県立自然科学館	1980年	新潟県新潟市
第8号	北九州市立自然史・歴史博物館	1981年	福岡県北九州市
第9号	栃木県立博物館	1981年	栃木県宇都宮市
第10号	岐阜県博物館	1982年	岐阜県関市
第11号	倉敷市立自然史博物館	1983年	岡山県倉敷市
第12号	宮崎県総合博物館	1983年	宮崎県宮崎市
第13号	クウェート教育科学博物館	1984年（旧名称：クウェート科学自然史博物館？）	クウェート市
第14号	戸隠地質化石博物館	1985年長野市立博物館茶臼山自然史館（2007年閉館） 2008年戸隠地質化石博物館	長野県長野市
第15号	柏崎市立博物館	1985年	新潟県柏崎市
第16号	徳島県立博物館	1986年	徳島県徳島市
第17号	仙台市科学館	1991年	宮城県仙台市
第18号	常総市地域交流センター	1992年（旧名称：石下町地域交流センター）	茨城県常総市
第19号	東北町歴史民俗資料館	1993年（旧名称：上北町歴史民俗資料館）	青森県東北町
第20号	仙台市科学館	1993年斎藤報恩会自然史博物館（2015年閉館） 2015年仙台市科学館 ※同館は第17号標本も収蔵	宮城県仙台市
第21号	きしわだ自然資料館	1994年	大阪府岸和田市
第22号	秋田県立博物館	2004年	秋田県秋田市
第23号	三重県総合博物館	2006年（旧名称：三重県立博物館）	三重県津市

コラム

47個の化石を発掘→全体の70～80%？

北海道開拓記念館（当時）が1972年に刊行した解説書では、「産出した化石骨は47点。主要部のほとんどが産出し全体の70～80%を占める」とされていました。しかし、ゾウの骨格は三百数十個の骨から成ると言われ、47個では20%にも満たない数です。「全体の70～80%」ではなく、「腰の骨や四肢骨など主要部の骨については70～80%が産出」という意味で記載されたのでしょうが、しばし誤解を招いてしまっていました。

なお、発掘された47個の化石のうち、京都大学での補修整理作業を経て発見・発掘時の形を維持できたのは40個で、他は破片化したものもあり、どの部位か判断が難しくなっているのが現状です。さらに近年、40個のうち1個はマンモスゾウの臼歯であることが判明したため（後述）、忠類ナウマン象標本のうち、展示や調査研究の対象となる化石の数は、39個と言えます。

忠類ナウマン象はどのような姿であったか？

ナウマンゾウの生息時の姿は復元画や模型による多数の事例があり、切歯や頭の形など基本的な特徴に大きな差はありませんが、体毛については生えていた説と無かった説の両方があります。忠類ナウマン象には体毛があったのでしょうか？

例えば約12万年前は現在とほぼ同じ環境（温暖期）であったため、当時の九州付近など、より温暖な地方にいたナウマンゾウは体毛が必要なかったかもしれません。しかし、現代の本州中部の動物園ではアフリカゾウの尻尾が凍傷にかかり、大部分を切断した事例があります。また、アジアゾウやアフリカゾウの耳は大きくて皮膚が薄く多数の血管があり、この耳を動かして血液を冷やす（放熱する）ことで体温調節をしています。これは熱帯～亜熱帯環境に適応・進化した姿ですが、日本の動物園では、冬季にゾウの耳の周囲や先端が凍傷で腫れた事例もあります。

約12万年前の北海道は現代とほぼ同じ環境ですから、冬季には雪が降り気温も氷点下が続く時期があったと推定されます。十勝の冬の寒さは特に厳しいものです。忠類ナウマン象は、現在のヒグマやキタキツネ同様に尻尾も含めて全身を体毛で覆うことで厳しい冬を越しつつ夏毛と冬毛を持つことで季節変化に対応し、耳はアジアゾウやアフリカゾウのように大きく進化しなかったと推定されます（写真2）。



写真2 忠類ナウマン象記念館の前庭にある生態復元模型

体は体毛で覆われ、耳は小さめです。

忠類ナウマン象をめぐる新しい研究成果

忠類ナウマン象を発掘した当時、その研究成果は1970年代のうちに北海道開拓記念館や十勝団体研究会によってまとめられました。それらの成果はその後30年間ほど定説化していましたが、2000年代以降に行われた化石骨の再検討や発見場所の詳細な地質調査の結果、次々と新しい事実が報告されました。

(1) 老獣と判明／2008年公表

忠類ナウマン象の発掘では、1969年に4つの臼歯が発見され、1970年には排土置き場から1個の臼歯が発見されました。当時の研究では、5個全てが同一個体の歯で、1970年発見の歯が未萌出の第3大臼歯（生涯で最後に生える歯）と同定されたことから、若い成獣とされました。しかし、最新の研究によって、1969年発見の歯は咬耗がかなり進んだ第3大臼歯と判明し、さらに、骨の成長状態（骨化）が、第3大臼歯をある程度使用した現生ゾウの骨と一致したことから、50才程度の老獣と判明しました（ゾウ

の平均寿命は約60才)。

(2) マンモスゾウの臼歯を確認／2008年公表

1970年に排土置き場から発見され忠類ナウマン象のものとされていた臼歯化石はマンモスゾウの臼歯と判明し(写真3)、年代測定の結果は約4万6000～4万5000年前でした。この年代の地層は忠類ナウマン象が埋没していた層から7m以上も上にあることから、この層を掘削した時の土と共に排土置き場に紛れていたと推定されます。今のところ、ナウマンゾウとマンモスゾウ両方が発見されているのは、忠類と北広島市だけです。

(3) 北海道初の足跡化石を確認／2010年公表

2008年に忠類ナウマン象発見地の詳細な地質調査が行われた際、忠類ナウマン象が埋まっていた「第三泥炭層」を含めた地層の各所に凹みが確認されました。このうち2個の凹みを発掘し石膏型を取って分析した結果、北海道初の足跡化石と判明し、ナウマンゾウと偶蹄類(シカや牛など蹄が偶数の動物)の足跡と推定されました。

今のところ北海道で足跡化石が発見されているのは忠類だけで、2019年と2020年には「忠類ナウマン象化石発見・発掘50周年記念事業」の一環として、幕別町教育委員会が主体となり発掘調査が行われました。2020年は大小23個もの凹みが確認され(写真4)、シリコンや石膏で型を取り分析を進めています。新型コロナウイルス感染症の影響で分析が進まず、足跡をつけた動物の特定には至っていませんが、凹みは大小複数あるため、ゾウ以外の動物の足跡も含まれている可能性があります。北海道の12万年前の化石は少ないことから、今後、忠類の足跡化石を研究することは、太古の北海道を探る上で極めて重要になるでしょう。



写真3 発見時のマンモスゾウ臼歯



写真4 2020年の足跡化石調査風景

忠類ナウマン象の埋没過程

忠類ナウマン象化石は砂礫質の「第三泥炭層」から発見され、右後肢の脛の骨が関節した状態で垂直に埋まっていたことから、沼地に足をとられて動けなくなりその場で埋没死したとされてきました。しかし、最新の研究によって、右肢の骨は元の地形の急斜面上に

位置していたため垂直状になっていたこと、すなわち沼に足を取られた結果ではないことが判明したのです（図2、3）。また、「第三泥炭層」で確認された多数の足跡化石も、足を取られて動けなくなるような地面ではなかったことを裏付けています。



図2 1970年の発掘調査風景

全体的に写真右から左（北から南）に傾斜し、茶色い上着の人物の前付近は特に急斜面（段差）になっています。



図3 急斜面上にある右肢の骨化石

また、「第三泥炭層」には川の砂礫が多く含まれ、沼ではなく流水環境で短期間に堆積した可能性はあることは発掘当時から指摘されていたのですが、最新の研究によって、洪水時に河川から溢れた泥水が砂礫と共に北から南へ流れ込む状況であったことが復元されたのです。以上のことから、忠類ナウマン象は「死後」に北から南へ流水によっ

て化石発見場所まで移動してきたと推定され、右肢の骨が関節した状態にあったことや右半身骨の保存状態が左半身より良いこと、そして狭い範囲に密集していたことから、産出場所の北側至近距離で右半身を下にして死んでいたと考えられます（図4）。

ある日何らかの理由で死亡した忠類ナウマン象は、左半身の腐敗が進んでいました。そ

のため洪水が起きて北から流れてきた越流にまず左半身の骨が運ばれ、やや遅れて右半身の肢が（皮膚や腱が残存し関節したまま）南に移動し、一部の骨は急斜面上で止まりました。腰の骨も少しずつ回転しながら移動して前後左右が逆になり、切歯の片方（左？）は水流で運ばれる途中で頭骨から外れたのでしょう。

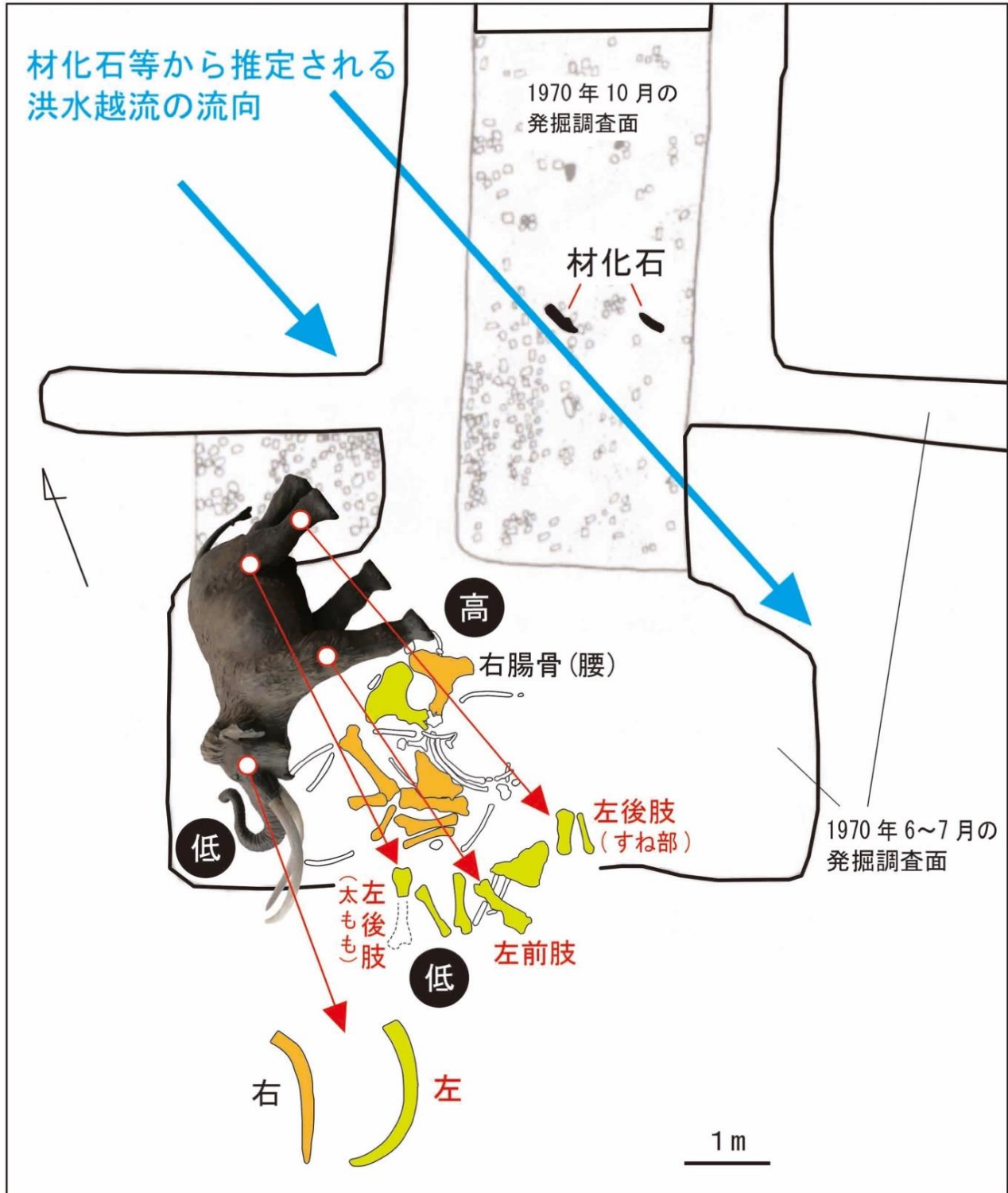


図4 死亡位置と古流向および骨の移動経路の推定図

北海道開拓記念館（1971）、高橋ほか（2010）を基図に加筆・作成しました。

地域と共に

以上の研究成果は、2019年度の「忠類ナウマン象化石発見50周年記念事業」で開催した特別展で紹介し、最新情報を知ってもらう機会としました。そして、北海道博物館と共催とすることで、初めて忠類ナウマン象の全ての化石（原標本）を里帰り展示することができました。このことによって、約50年前の発掘現場を見学した忠類地区の皆様が当時の感動の記憶をより鮮明に思い出してもらえたと思っています。さらに、忠類発展の基盤にこの化石があったことを子ども達にも体験学習を通して理解してもらうため、忠類ナウマン象記念館での展示設営時に忠類小・中学校の児童・生徒を招き、原標本を間近に見てもらいながら50年前の発見・発掘のことや近年の研究成果について解説しました(写真5、6)。



写真5 原標本を前に忠類の子ども達へ解説



写真6 特別展の様子

また、これからも子ども達を含めた地域全体が忠類ナウマン象と共に歩んで行けるような企画が必要と思い、忠類小学校と札幌市円山動物園に協力を依頼し「かぼちゃプロジェクト」を始動しました。同園では、普段から動物達の糞を元に堆肥を作っており、近隣の小学校や児童会館へ提供して野菜栽培に活用してもらっていました。そこで、その堆肥を使って忠類小学校の学校農園でかぼちゃを育て、動物園のゾウへプレゼントすることにしたのです。当時の円山動物園は11年振りにアジアゾウを導入し、一般公開を間近に控えていた時でした。現代と古代のゾウがつかないだ、忠類地域ならではの企画です。



写真7 かぼちゃを食べる
アジアゾウ

苗植えは6月に行い、9月上旬には6年生が修学旅行で動物園を訪れ、ゾウ舎バックヤードを見学した後、「寄せ書き目録」を贈呈しました。子ども達には、その都度、この企画の意義と忠類ナウマン象の学術的価値について説明しました。かぼちゃは9月下旬にゾウ達へプレゼントし(写真7)、足で上手に割りながら美味しそうに食べる様子を動画で記録し

て忠類小学校で披露しました。忠類ナウマン象化石の発見・発掘時には生まれていなかった世代ですが、地元の宝「忠類ナウマン象」についてより一層興味や関心、そして誇りを持ってもらう機会とすることができたと思っています。このプロジェクトは円山動物園と忠類小学校をオンラインでつなぐなど毎年少しずつ発展させながら、2022年現在も継続しています。

おわりに

かぼちゃプロジェクトは、子ども達にとって普段当たり前のように身近にいた忠類ナウマン象のことを改めて深く学んでもらうだけでなく、学校農園で野菜を栽培する目標をこれまでとは違った目線で設定できる効果も生まれました。さらに、万が一、学校農園のかぼちゃが不作であった時に備え、忠類各地で栽培をサポートする体制が整いつつあるなど、事業そのものが地域全体の取り組みとして成長し始めています。

今後も、忠類ナウマン象や足跡化石に関する研究成果をかぼちゃプロジェクトや新たな企画に反映させ、より良い生涯学習事業を展開していきたいと考えています。次の50年間にどのような新発見があり、どのような研究が行われるのか。そして、次世代の子ども達がそれを主軸として発見・発掘100周年記念事業を展開し、その側で嬉しそうに立っている忠類ナウマン象の姿を想像すると、とてもワクワクします。

参考文献

北海道開拓記念館（1971）ナウマン象化石発掘調査報告書。北海道開拓記念館研究報告1，82頁。

北海道開拓記念館（1972）忠類産ナウマン象ーその発見から復元までー。資料解説シリーズ1，40頁。

幕別町教育委員会（2022）幕別町忠類ナウマン象化石発見・発掘50周年記念事業実施報告書40頁。

高橋啓一・出穂雅実・佐藤宏之編（2010）北海道忠類ナウマンゾウ産出地点の再調査報告。化石研究会会誌 特別号4，79頁。

添田雄二

札幌市に生まれる。平成9（1997）年より北海道博物館に23年間勤務し、忠類ナウマン象化石の原標本を管理する。同館在職中の平成23（2011）年に理学博士を取得する。

令和3（2021）年4月より幕別町教育委員会学芸員となる。

ふるさと忠類への遺言 1

「こんな忠類に」

～将来の忠類がこんな姿になればいいと思いをめぐらす時～

すぎ 坂 たつ 男
杉 坂 達 男

どうしても大切なこと。それはこの忠類の生い立ちを詳しく
知ることです。

明治27（1894）年、丸山山麓に群馬の岡田新三郎翁が
鋤を下ろして百三十年、当時は現在の市街地一体はハンの木と
ヨシ原であったそうです。私の先祖も岐阜県から移住して百年
ちかくなりますが、開拓の大変さは私も体験しました。昭和
24（1949）年、当時の大樹村から分村しました。当然、
村議会が設置されましたが、会議を行う場所がなく、忠類神社
の社殿や農協の倉庫の二階を借用したと聞いています。このよ
うによくひとり立ちした忠類村にどれほどの困難があったか
は計り知れません。それから57年後の平成18（2006）

とし、忠類村は幕別町と合併することになりました。国の財政支援（交付金）が50%近く
の予算編成となり、村は財政弱小町村として扱われました。このように財政の問題が、
合併の大きな要因でした。幸い、幕別町の駒畠地区と古くから交流があったことから、
様々な問題を克服することができました。そして、幕別町と忠類村で高度な判断がなさ
れ、忠類村にある学校や診療所等、全てのものがそのまま存続されることになりました。

合併後、本町地区のみなさんとの交流も活発になり、初めて忠類を訪れた方から「き
れいな町ですね。みなさんいい人ばかりですね。」と言われ、私はその言葉を聞いて、う
れしい気持ちになりました。どこでもそれぞれの地域性があり、そこに住む人たちの
人間性が生まれます。その姿は、言わば「人づくり」の根幹です。私はかつて忠類中学校
で生徒のみなさんに話をする機会がありました。その中で「将来周りの人に気遣いや気配
りのできる人になってほしい。」と述べました。この地域が平和に発展する糸口は「人づ
くり」を進める中に随所にあります。忠類で育った「忠類人」が広く社会で評価され、
それぞれの場所で活躍されることを期待しています。



「最後の村議会で
挨拶をする杉坂さん」

次に、この地域が純農村地帯として発展していく上で、地理的条件から酪農が適地と
 考えます。永続経営を考慮しながら経営の大型化で農業を盛んにすべきです。そして、
 投資リスクの少ない経営手段で所得率を高くして、食糧不足が心配される日本の将来の
 ために農作物の自給率を上げていくことが必
 要不可欠と考えます。

一方で、今後は農業と観光が結びつく面が
 多くなります。全国的に各地が都会化される
 中で、農村は唯一の癒しの場として人々が訪
 れるようになります。それは農業を観光化す
 るのではなくミニ観光牧場や加工施設の設置
 等で、高規格道路の整備が進み道路事情の変
 化に伴う通過型の観光客を引き寄せる手段に



「一番牧草の収穫
 ～機械の大型化が進む農業～」

もなると思います。今後の傾向として、農業中心とした観光には住民のみなさんが知恵を
 出し合う重要な課題であると思います。本地域には、ナウマン象を中心にしてコンパクト
 ながら豊富な観光資源があります。その活用についても深く関心を持つことです。

私は将来の「忠類」を思い描きながら、三点について考えてきました。

一つには、ふるさとの歴史を住民のみなさんがもっと深く学ぶこと。

二つには、有形・無形の人づくりを進めること。

三つには、農業拡大と観光開発を進めること。

この三点は、私がいつも心に描いていることです。

心のやさしい豊かな人間性の「忠類人」が育っていくことを心から願っています。

杉坂達男

忠類に生まれる。若くから牧場経営に取り組む。忠類を愛し、郷土誌「ふるさと」
 の編集に長く携わる。

忠類村議会議員〔昭和60（1985）年～平成18（2006）年〕を長く務め、
 幕別町との合併時には村議会議長として手腕を発揮する。そして、合併後は幕別町
 議会議員〔平成18（2006）年～平成23（2011）年〕として忠類地域の発展
 に尽力する。

ふるさと忠類への遺言^{ちゅうるい ゆいごん} 2

「忠類は永遠に」^{ちゅうるい えいえん}

～いかなる時も新しい一歩を～^{とき あたら いっぽ}

えん どう せい いち
遠 藤 清 一

平成18（2006）年1月25日。忘れもしない忠類村閉村式の日。村旗を降納して57年の村の歴史に幕を下ろしたその時、私は言いようのない虚脱感に襲われていました。そして、村長として駆け抜けた3年8か月の日々が頭の中を走馬灯のように駆け巡っていました。



「当時のことを語る遠藤さん」

平成16（2004）年4月、十勝環境複合事務組合へ加入して、ゴミの減量化や分別の推進等、環境保全に向けて、ごみの有料化を進めました。

平成16（2004）年9月、道路整備の改善が図られたことから、自動車道の整備推進を盛り込んだ意見書を採択し、国へ提出しました。

平成17（2005）年3月、議員定数を2減らして定数を8にする条例を可決しました。この

改正は、昭和48（1973）年以来、実に32年ぶりの改正でした。

ここに挙げたことは私が取り組んだ中のほんのわずかなものです。これらの取り組みとは別に、避けては通れない問題として、私に突きつけられたのは「合併問題」でした。

平成14（2002）年5月、私が村長に就任したこの時、すでに平成の大合併の嵐が吹き荒れていたのです。すぐさま8月に、各団体長・各団体の推薦者・一般公募者からなる「村づくり検討住民会議」を立ち上げました。そして、12月には「住民懇談会」を8会場で開催しました。この後、平成15（2003）年3月に村議会が「市町村合併問題調査特別委員会」を設置しました。いずれも、財政難から村の将来に希望が持てず、合併止むなしの意見が大半を占めました。開村以来の最大の難局面に立たされ、忠類が将来に渡り豊かな土地となるように、「合併」という新しい一歩を踏み出すことを決意しました。6月、南十勝五町村の「広域行政検討会議」での任意合併協議会設置の断念。8月、「幕別町・更別村・忠類村任意合併協議会」の設置。12月、法定合併協議会である「十勝中央合併協議会」の設置。平成16（2004）年11月、更別村の十勝中央合併協議会からの離脱。すぐさま「幕別町・忠類村合併協議会」への名称変更。

めまぐるしく変化する状況を踏まえながら、新しい一歩を踏み出すには、膨大な時間とエネルギーが必要でした。平成17（2005）年2月25日、幕別町・忠類村合併協定

調印式の席に着いた時、忠類の未来を守ることができたという安堵感が静かにこみ上げてきたことをよく覚えています。

私は、合併の成果を論じるには、「合併から20年は時間が必要だ。」と、当時から言い続けてきました。地域のみなさんの建設的なご意見を町当局に届けていただき、今後も忠類地域の発展を見守っていただきたいと思います。



「幕別町・忠類村合併協定調印式」
平成17(2005)年2月25日

さて、村政の思い出はここまでにして、若い頃のことや地域のことを述べさせていただきます。

昭和38(1963)年から、村に2台しかなかったトラクターを借り受け、何軒もの農家の畑を耕しました。その仕事が終わると、自分の家の畑の仕事で汗を流しました。そして、秋の収穫が終わると、山で木材を切り出す出面(日雇い労働者)として働きました。いくら働いても、いくら努力しても、暮らしは楽になりませんでした。その後、昭和41(1966)年に役場に入れていただき、建設課や民生課、総務課で、農地の排水整備や住民サービス、観光開発に取り組みました。夜遅くまで忙しく働いた役場職員時代でした。泥にまみれて貧しい生活をしていた私が、村の発展と共に、少しずつ生活が向上していったことが、つい昨日の日のようです。私は常々「苦しいことを苦勞と思おうか、苦勞と思わないか、これが人生の分かれ目だ。」と考えてきました。そして、「いかなる時も後退せず、新しい一歩を踏み出すことが大切である。」と取り組んできました。これが、後輩のみなさんの活動のヒントになれば幸いです。

また、この77歳の老人を近所の中学生在が「せいちゃん」と親しみを込めて呼んでくれます。まさしく老若男女、誰もが「せいちゃん、せいちゃん」と声をかけてくれます。このように、忠類では、人と人との付き合いが誰とでも親族のような関係です。このような優しい人間関係を築くことができるのは忠類だけであると自負しています。

こんな素晴らしい忠類が、後輩のみなさんの努力で、新しい一歩を踏み出すことが繰り返され、未来に渡り永遠に発展していくことを願っています。

遠藤 清一

忠類に生まれる。役場職員として村政に長く携わる。

平成14(2002)年に村長選挙に当選する。村長就任と同時に「平成の大合併」問題に直面し、任期〔平成14(2002)年～平成18(2006)年〕のほとんどを合併論議に費やす。幕別町との合併を選択し、最後の忠類村長となる。